



新見市男女共同参画情報紙

りぼん

vol.30
2020.10

さあ、開こう ほんの扉を かるやかに
どく書の秋を せんめいに
記憶に残す 編集げん稿



私たち編集委員が、男女共同参画の視点から本を選びました。
今年の秋が読書を通して充実し、記憶に残る良き秋になるよう願っています。

「わたし、定時で帰ります。」の著者が描く、終わりのない「仕事」と戦う人たちをめぐる長編小説！

オススメ!



朱野 陽子 / 著
講談社 / 刊



対岸の家事

オススメ!



図書館の司書さんオススメ

※著：著者、刊：出版社

「わたし、定時で帰ります。」の著者が描く、終わりのない「仕事」と戦う人たちをめぐる長編小説！

ブランテルグループ / 著
あかね書房 / 刊



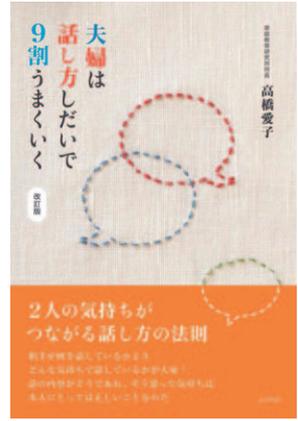
オススメ!



女と男のちがって?
(あしたのための本)

夫婦は話し方だけで

9割うまくいく



高橋愛子／著
コスモ21／刊

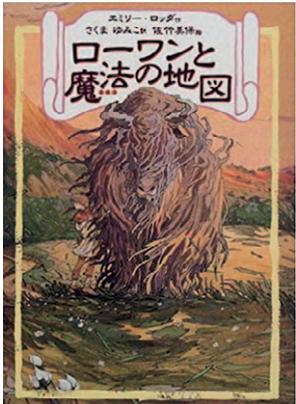
言葉って、心を癒す薬にもなるんです!! キーワードは、感謝、自立、思いやり

男女共同参画を実現するためには、まず夫婦の協力は欠かせないと考え、この本を手にとってみました。本書はカウンセラー、セラピストとして活躍し、全国で講演活動を行って来られた高橋愛子氏の著書です。実は、私もかつて高橋先生の講演を拝聴し、経験に基づいた具体的な話に感銘を受けました。本書の最初の章である「やり直しがきく夫婦、きかない夫婦の違い」という文字がパッと目に飛び込んできました。もし自分が「やり直しがきかない夫婦」の典型例のように書かれていたらどうしようと思つて、ドキリとさせられました。全編を通じて、夫婦(男女)の会話の重要性について

書かれているなど、私は感じました。本書は、「1 不満を言葉にして表現しにくいとき」、「2 正直な気持ちを打ち明けにくいとき」など、アドバイスが場面ごとに書かれており、自分の読みたいところから、短い時間で読み進めることができます。高橋先生の「きちんと相手の気持ちを理解し、お互いを傷つけず、自分の考えを伝え合う会話を身につけるための一助になれば…」という言葉に象徴されるように、全編に高橋先生の温かい気持ちが通底する良書と言えると思います。

谷岡委員

ローワンと魔法の地図



エミリー・ロッド／著
あすなる書房／刊

生きることは冒険だ! あなたにしかできない冒険がある!!

この本の舞台である「リンの

谷」では一人一人が役割を持っていきます。主人公であるローワンは、同い年の子供に比べ背丈も小さく、一番簡単なバクシヤーと呼ばれる大人しい動物の世話係を任されています。 「リンの谷」の人達は皆勇敢だったので、ローワンは気が弱く臆病な自分にコンプレックスを抱いていました。ある日、ローワンは村の危機を救うため勇敢な村の大人たちと共に危険な旅に出ることになりましたが、強く、たくましく思えた大人たちは、それぞれの弱みに打ちひしがれ、一人また一人と旅から抜けていくのでした。ローワンは最後まで旅を続け、ついに目的を達成しました。バクシヤー係の経験が村を救うことに繋がったのです。

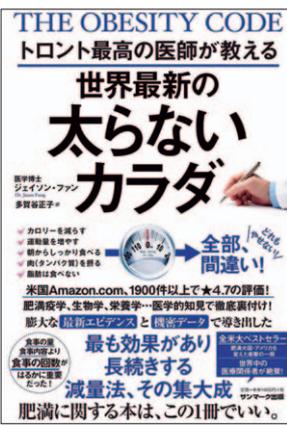
果たして、村でのローワンの役割は押し付けられた簡単な仕事だったのでしょうか。答えは本の中にたくさん書いてありました。ローワンの役割は、ローワンだからこそできる、大切な仕事だったのです。

「男性だから」「女性だから」という言葉は、日常でよく聞かれます。人間を単純に分類することを、私は恐ろしく思います。代名詞でばやけた一人一人の個性を、ないがしろにしてしまつてはいないでしょうか。たくましい人、頭の回転の早い人、優しい人、周りの空気を明るくしてくれる人。

「それぞれが尊重され、自分に一番合った役割を見いだせる社会」、男女共同参画とはそういうものではないかと、私は思います。

磯田委員

トロント最高の医師が教える 世界最新の太らないカラダ



ジェイソン・ファン／著
サンマーク出版／刊

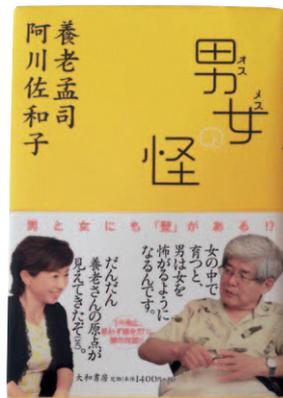
あなたに合ったやり方で!!

私は以前とても太っていました。しかし、職場の同僚がフルマラソンを走ったことをきっかけに、私もマラソンを始めました。始めて3ヶ月でハーフマラソン、1年でフルマラソンを完走することができました。走る練習をすると当然痩せてきます。3ヶ月で15キロ、1年で実に25キロ体重が減りました。しかし、子供が生まれるたびに『走る時間があつたら子守りや家事を手伝つて』と妻に言われ徐々に走る時間が少なくなり、そ

の影響で徐々に体重は増加しました。どうしたら良いか思案していた頃、この本に出会いました。この本に紹介されている減量方法は、空腹時間を増やし、肥満の元になるホルモンの分泌を減らすことでした。ということで食事を1日1回と決め1か月経過してみました。結果1か月で5キロ程度の減量に成功しました。空腹を感じますが、夜には食べられると思うと案外我慢できます。昼過ぎの満腹による眠気とも格闘する必要はありません。最近あった健診では、血圧が以前に比べ下がっていました。そのほかにもメリットがありました。家での食事回数が減った分、出来る家事が増えたことです。今では末っ子の食事は私が食べさせています。また、休日の朝・昼の食事のことを考えなくて良いので、妻にとっても楽なのではないかと勝手に考えています。そして何より家族みんなが健康で過ごせることが一番の共同参画ではないかと思いつつ今日も1日1食で過ごしています。

石田委員

オス
メス
男女の怪



養老孟司、阿川佐和子／著
大和書房／刊

先入観はもういらない

男女の間に立ちはだかっている「壁」とは？「性別」というテーマで解剖学者の養老孟司氏と、エッセイストの阿川佐和子氏がおしやりするゆるい対談集です。

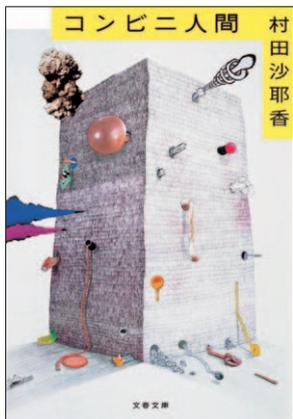
養老氏（生き物好き）が披露する生き物のオスメス雑学はどれも興味深く、「ヘー」とか「ほんとかかな？」と、楽しく読み進められます。タマシギというもっぱらオスが子育てをする鳥の話、環境の変化に応じて後天的にオスになったりメスになったりする魚の話などなど…。こうやって見てみると、鳥や魚や虫の「性別」の壁って人間と比べてけっこう曖昧で、その柔軟な対応力には驚かされます。

印象に残っているのは、養老氏が経験したブータンでのエピソードです。
『ブータンの農家に行って、英語

でマスターが、つまりご主人が挨拶に来ますからと言われて待ってたら、おばあさんが出てきてお茶を淹れてくれたんです。ところが待てど暮らせどご主人が出てこない。で、最後に「あ、今、お茶淹れてくれたおばあさんがご主人なんだ」って気がついた（笑）
これを読んで、私もあつと思えました。性別による役割分担といった先入観が自分自身にもあるなあど気付かされました。
あまり身構えずに、楽しく読んで欲しい一冊です。

大隅委員

コンビニ人間



村田沙耶香／著
文藝春秋／刊

普通って何!?

芥川賞を受賞したということで、メディアで取り上げられていた「コンビニ人間」というタイトルに興味をもち、書店に行く機会が

あったときに手に取ってみました。「コンビニ」という世界を通して、都会の日常を映し出す1冊となっていて、何事も画一化、マニュアル化される社会に溶け込み、歯車となる主人公が冷静に、他人事のように生きています。就職も結婚も恋愛経験すらもない、大学生の時から18年間同じコンビニでバイトを続ける主人公の女性は、幼いころから常識はずれの言動を繰り返して、「普通」でないことを干渉され続けていました。コンビニでは、制服とマニュアルによつて、性別も年齢も価値観も違う人とも平等に「普通」の店員になることができる。彼女にとつて、コンビニは「普通」の人間となり、社会とつながる唯一の場所でした。

主人公を異質なものととらえる周囲が、主人公を矯正しようとする描写や、奇妙に思えるほどコンビニとつながる主人公に不快感すらありました。こう感じるのが「普通」なのだろうか、「普通」の意味を考えさせられました。周囲に染まっているはずの主人公が、実は何にも染まっていないように見え、あまりにも淡々と生きてみている、みたいだなと不思議な感覚になりました。

小林委員

西の魔女が死んだ



梨木香歩／著
小学館／刊

誰もが持っている
自分らしさという宝物

物語は、主人公のまいが母親の運転する車に乗っているところから始まりです。

「西の魔女が死んだ」魔女と呼ばれる祖母が亡くなったのです。それをきっかけにまいは2年前の事を思い出します…

この作品に登場する「魔女」は、私たちがよくイメージするものとは違います。魔女とはどういう存在だったのか。本当に奇跡を起こすことだけが魔法なのか。

主人公まいの悩みや周囲を取り巻く環境は、誰でも共感しやすいものです。ファンタジー小説のよきな派手さがなく、まいの心情描写が細かいことも、つい感情移入してしまいがちな点の一つだと思います。

男女共同参画と聞くと堅苦しく

とらえられがちですが、自分らしさや生き方について考えるという点ではあまり難しいことではないと思います。子供にも大人にも読みやすく、理解しやすいお話と文章なので、この本をきっかけに物語の主人公を通して考えてみてはいかがでしょうか。

川上委員

人の心を動かす話し方



和田裕美／著
廣済堂出版／刊

相手をよく知ることは自分を
知ることを

この本のタイトルからくる印象は「人をコントロールする方法を知るための本」なのかと感じる方もいるかもしれませんが、しかし、この本に書かれているのは話す相手をよく知り、相手と自分とが幸せになるための方法です。

長い自粛生活の中で、自分に余裕がなくなってしまうこともある

かもしれない。私はそんな時にこの本に出会いました。人はそれぞれに違った考え方を持っています。これは生きてきた環境や時代、性別が違えば当然の事なのです。ですから、相手をよく知る事、そして相手に自分の気持ちを伝える方法を知ることが、いま重要なことなのではないかと思えます。

誰かとの関係をより理想のものにしたい。相手を尊重しつつ自分の思っていることを伝えたい。そんな考えをお持ちの方にぜひお勧めいたします。

土屋委員

紹介している本は、すべて、新見市立図書館に所蔵しています。受取はどこの館でも可能ですので、お近くの図書館または図書コーナーにお問い合わせください。

なお、新見市立図書館の問い合わせ先や開館時間などは、市報にのみをご覧ください。



編集後記

編集委員 小林 雄斗

今回のりぼん第30号は新型コロナウイルスの影響により、編集会議が中止となったこともあり、通常より短い編集期間での発行となりました。コロナ禍で外出自粛やリモートワーク、食品のテイクアウト等が広がり、社会参画のあり方も急速に変化してしまいました。

今後この情勢ですから、IT化、効率化が推進されていくとは思いますが、時に少し社会と距離を置き、本を読む、運動をする等、自らの領域で自分を保ち、そしてまた社会とつながっていくことが大事なのではないか、と今回の編集会議を経て感じました。

With(ウィズ) コロナという言葉があります。コロナウイルスへの感染リスクがある中でどううまく日常生活を送っていくかということですが、社会参画も同様に、学校や職場、地域等へ社会参画する自分と自分らしくいられる場所との共存が、今日を存分に充実したものにできるのではないかと思います。今回紹介させて頂いた本もその一助になれば幸いです。